

令和7年度 第2回埼玉県子供読書活動推進会議 議事録

日 時：令和8年2月17日(火) 15時00分～16時00分

開催方法：久喜図書館及び Teams によるオンラインのハイブリッド開催

出席委員：藤倉委員長、宮澤副委員長、小川委員、中村委員、三國委員、恩田委員、
田中委員、須田委員、寺嶋委員

欠席委員：新保委員、抜井委員、田沼委員

1 協議

協議事項について、委員から以下のとおり意見があった。

全体目標と指標の最新値について

【中村委員】

全体目標の調査対象について、小学生は4年生から6年生が対象ということであるが、特別支援の子供も対象となっているのか。

【事務局】

この数値は、埼玉県学力・学習状況調査の結果となっているため、同調査を受けた特別支援学級の児童は入っている。特別支援学級については、同調査を受けてもよいし受けなくてもよいということになっている。

【宮澤副委員長】

全体目標をみると、不読率が下がらない状況にあるが、子供読書活動推進計画の策定率の上昇などから、子供読書に関わる方々への意識の高まりが見られる。不読率が下がらないことも課題ではあるが、子供読書に関わる人の意識が高まっていることの重要性を強調したい。昨年12月には、図書館と県民のつどいに参加し、そこでも読書に力を入れている人の様々な活動を見ることができた。そういった活動が県内で行われていることも、子供読書を支えているため、これから広がっていくことに期待したい。

まず前提として、不読率が上昇している要因として、社会的・文化的な要因が多くあるということである。これは、埼玉県の状況だけでなく全国的な状況を考える必要がある。10月の第1回会議でもお示ししたが、不読者・不読率は、「学校読書調査」(全国SLA)¹を見ても全国的に増加傾向にあることが分かる。

社会的・文化的な要因について考えられるものとして、「スマホ時間と読書時間の逆相関関係」があるのではないかとということである。スマホの使用時間が増えることで、読書時間が減少しているということである。

また、子供の余暇活動の多様化も要因として考えられる。動画サイトやSNS等の利用に移行していることから、不読率が上昇していると言えるのではないかと。

さらに、児童生徒の多忙化や、大人でも読書をする人としらない人がいるということも要因として挙げられると考えている。子供の文化は大人を見て作られるため、読書文化の価値が相対的に低下しているということが言えるのではないかと。

地域文化的な社会的要因を見てみると、書店数が減少していることで、学校図書館以外で

¹ 「学校読書調査」の結果(全国学校図書館協議会)

<https://www.j-sla.or.jp/material/research/dokusyotyousa.html>

本に触れる機会がないということも要因として挙げられるのではないか。

学校という点から報告すると、学校がカリキュラム・オーバーロード²により、朝の読書時間を確保できていないということが挙げられると考える。それにより、読書の習慣化にうまくつながらないのではないかと懸念がある。文部科学省「学校図書館の状況に関する調査」から「全校一斉の読書活動の実施状況」を参照し、「全校一斉の読書活動をしている学校数」のうち「毎日実施している学校数」の割合の推移を分析したところ、小学校、中学校、高等学校全ての段階において減少していることが分かる。このことから、朝の空いた時間が減少しているということも要因の一つだと考えられる。

そのほかに、学習障害を含めどうしても読書に向かない人がいることも考えなければならない。それ自体が悪いということではなく、読書以外の動画等のメディアの方が親しみやすい、好奇心が持ちやすい、関心が持ちやすい、知識を取得しやすいといった子供たちも大切にしなければならない。また、日本語指導が必要な児童生徒が増加していることに対する、読書環境の整備については、必ずしもその地域に対応した状況になっているとはいえないところがあるので、こちらについても進めていく必要がある。

最後にまとめると、不読率の減少のためにこれまで多くの良い実践が行われているため、それは引き続き継続していただきたいということ。また、良い実践が行われたからと言って、不読率が下がるということではなく、社会的文化的な要因が大きくかかわっているということである。

【小川委員】

学校が授業時間を確保すると同時に、教員の教材研究の時間の確保のため、帯で読書時間を確保することは減ってきている。子育てサロンでは、必ず絵本などを置いて読み聞かせを行っているが、子供たちは食いつくように興味を持っている。しかし、保護者が家庭で読み聞かせをやっているかという、やっている家庭は減ってきていると思う。地域や学校でそういった機会を設けることが必要だと思う。

【田中委員】

当園では、子供たちにとって図書館は非常に親しみやすい場所であると考えている。家庭によって選ぶ本に違いがあり、同じ本を何回も読む家庭や、日替わりで異なる本を読む家庭など、家庭によって状況は様々であるという報告があがってきているところである。この会議で得た情報を、園のお便り等で啓発・働きかけを行うことが、幼児教育の段階から重要だと感じている。

【須田委員】

朝読書の時間が、朝学習の時間に变化している学校が多いのではないと思う。ある程度、読書習慣が望める学校の場合、朝の10分を使わなくても図書館の利用率は上がっている。県立高校の司書は、例えば学校で講演会などがあると、そのテーマに基づいた図書館の飾りつけを行ったり、興味を引きそうな本を前面に置いたりするなど、生徒が手に取りやすい工夫をしてくれる。前任の高校では、図書委員の生徒がクイズを作成し、クイズに正解すると借りられる期間が延びるといった特典を付けて興味関心を引こうとする工夫をしていた。また、1年生のうちから、図書館を使う学習習慣がつくと、図書館に行く習慣もつけられると思う。

² カリキュラム・オーバーロード (Curriculum Overload) とは、「学校における教育・学習内容が質・量ともに過剰/過密となることで、児童生徒や教員に過度な物理的・精神的な負担がかかっている状態」のこと

【恩田委員】

全体目標の小学生の調査対象が小学校４年生から６年生という点について、小学校４年生以上になると、発達段階的にも自分の意志で行動する子供が多くなる頃なので、本をどう読むか自分で計画を立てながらできるようになる。そのため、４年生以上の子供を対象に調査していることに意味があると思う。それらの子供が、自分の意志でどんな本を読もう、借りようと考えるときに、それまでどんな文化に触れてきたか、親子でどんな時間を共にしてきたかということが非常に影響する。先ほどの宮澤副委員長の発言にあったとおり、子供たちの自由な時間の過ごし方が多種多様になっている中で、自由な時間に読書を選択するためには、それまでの生活や文化が影響しているため、本を選ぶように子供をどう育てていくかは大人たちの大きな役割だと思った。

また、今の小学生を見てみると、ハウツー本や変な生き物図鑑等、子供たちの興味関心は様々である。多様な興味の入り口がある中で、自分がいろいろなことに興味があると子供たちが知ることでも大事であるし、いかにその子供の興味にフィットする本を選ぶかということも不読率を下げることにつながるのではないか。子供たちの読書に対する警戒心や難しいというイメージを取り除いて、楽しい面を伝えていくことが必要であると思う。

【三國委員】

出版業界が不況だといわれているが、児童書の販売金額はそこまで落ちていないと聞いている。また、大人が読ませたい本とは違って、ホラーやオカルトの本が人気だったりする。不読率は改善していないが、本を読む子供は読んでいるため、決して読書環境が悪いわけではないと考えている。

【寺嶋委員】

本との出会いや出会う場所が、時代の変化によって大きく変わってきていると感じている。自由な時間に SNS を利用している子供が増えているという話があったが、本に関する情報や魅力について、SNSなどを手段として情報発信していくことも一つの方法ではないかと思った。

2 事例発表

県立久喜図書館の事例発表を行い、委員から以下のとおり意見があった。

【三國委員】

取組一覧のうち１４番「人材育成の推進」について、研修に参加した人数が少ないのが残念に思う。このような研修に関する文書について、市町村に届く時期が申込締切間近であることが多い。研修のお知らせなどは早めに周知いただけると有り難い。

【田中委員】

事例発表資料９ページに「学校図書館運営に役立つリーフレット」とあるが、今回のリーフレットで特に力を入れている点があれば教えていただきたい。

【久喜図書館 佐藤主任司書】

本リーフレットは、特別支援学校向けのものだが、内容としては、県内の特別支援学校における読書活動の事例紹介や、インタビューの内容などを掲載する予定である。また、特別支援学校は司書がおらず、例えば分類や装備の仕方、選書について悩んでいるという声も聞くため、図書館整備に役立つポイントを掲載する予定である。

【田中委員】

本園では、科学教室と読書を結び付けたいと考えており、幼稚園でも科学の本に興味を持

つ子供が非常に多いので、11ページに「かがくのじかん」の記載があったのが大変参考になった。

【小川委員】

久喜図書館でこれほどまで多くの取組を行っていることを知って感動した。自分の地域や団体で活用できそうなものを改めて確認したいと思う。12ページの「とっておきのえほん100冊」は、一般のボランティア団体でももらうことができるのか。

【久喜図書館 佐藤主任司書】

お渡しすることは可能である。

【中村委員】

科学技術研究会という団体にも所属しており、日本で発売される児童向けの科学本の研究をして、科学の面白さを子供たちに広めようという講座を行っている。図書館は夏休みや冬休みの間だけ、科学講座を行っていることが多いが、今回の事例発表で「かがくのじかん」を行っていることを知って嬉しかった。

【藤倉委員長】

本日の意見を大きく3つにまとめると、1つ目が、読書のあり方というのは、紙の本だけでなく電子書籍も増えてきて、入手する手段もますます多様化しているという御意見である。2つ目に、子供読書に関する取組を行ったり、関心を持って接したりしている人が、とても増えてきているのではないかという御意見である。3つ目が、例えば年齢や発達段階に応じて、子供たちの視点に立って、魅力を情報発信していくといったことが、私たち大人にとって、これから必要になってくるのではないかという御意見である。

子供たちを取り巻く環境は、年々変化しているが、読書支援という形で変わらない部分、変化していかなければいけない部分について、引き続き取り組む必要があると感じた。また、子供たちの声を聞きながら、読みたい本に出会えるように、私たち大人がいろいろな形でアプローチをしていくことが、今後ますます必要になると感じた。